

五都市(上海・南通・揚州・鎮江・無錫)周遊(4)

寺西 俊英

3日目(5月22日)の朝が来た。5月22日は旧暦の4月8日、つまりお釈迦様の誕生日である。今日は、大明寺で何か催しものがあるかも知れないなと思いつつ外を見ると雨が降っている。雨だということに近くの寺まで散歩してきたという方もいた。朝食後ホテルの前で記念撮影し、9時過ぎにバスに乗り込んだ。今日は揚州を出発して鎮江に向かう。鎮江とは揚州と長江を挟むように位置している街である。「潤揚長江公路大橋」を通過して10時頃に長江沿いに建っている金山寺に着いた。

橋の名称の「潤」は、この橋の架かっている地区の昔の名前から採った。隋の時代、潤州という地名であったのだ。まもなく名前は変更されたが今でも鎮江市の6つの行政区の中に「潤州区」として名前が残っている。中国では、地名に「人民路」とか「解放路」、「中山公園」など昔の由緒ある地名をいとも簡単に変更しているが、一方で歴史を残す大切さも理解しているのであろう。なお「鎮江」の名前の由来であるが、ある中国人の論文の中に〈揚子江を鎮める〉願いから来ていると書かれていたが、なるほどと思った。揚子江(長江)にしても黄河にしても穏やかに流れているように見えて、数えきれないくらいの氾濫等により川の流れを変えている。後述の「金山」はその昔は、長江の中の小島であったが長江の流れによって陸続きになっている。次号で書く予定の「西津渡」も宋の時代は長江に面した港であったが、その地は今では住宅街や公園になっている。

ここで「鎮江市」の歴史を振り返ってみたい。中国に関心のある方はご存知であろうが関心のない方には聞いたことがない街と思うからだ。かくいう私も大連に勤務した時の2008年に社員旅行で行くまでは知らなかった。鎮江市はその昔「京口」と呼ばれ、三国時代(220年～280年)には呉の孫権が一時都を置いたところである。北宋時代(960年～1126年)から鎮江の名前が始まった。前後するが、隋の時代(589年～618年)に北京と杭州を結ぶ「京杭大

運河」が掘削され長江とも交差したが、この運河の恩恵を被ったのが交差点地点になった揚州と鎮江である。揚州と同様商業都市として発展した。交通の要衝の地となった鎮江は近代になって歴史の表舞台に何度も登場するようになった。年代別にポイントを箇条書きにすると以下の通りである。

1842年7月:アヘン戦争後期にイギリスが鎮江を占領。

1858年:英仏連合軍が清朝の弱体化の中で攻め入ったアロー戦争後の「天津条約」で条約港に指定される

1861年～1927年(66年間)英国租界が置かれ、英国領事館が設けられた。

1929～1949年:鎮江に江蘇省政府が置かれた
1949年:中華人民共和国成立、江蘇省の省都は南京に移された。

1986年:「国家歴史文化名城」に指定される。

さて、鎮江市の長江沿いには小さな山が3つある。「金山」、「北固山」、「焦山」である。金山はかつて小島であったが、前述のように長江の流れが北にずれたことにより陸続きとなった。高さがわずか43mの金山に建てられたのが金山寺である。創建は東晋(317年～420年)の時代で境内には多くの建物があり、金山は寺院の中に埋もれているかの如くである。中でも高さ30mで八角7層の「慈寿塔」がひと



金山寺入口、雨にたたられた一日でした



北固山頂の寺院から長江を望む

きわ目を引く。慈寿塔は1400年余りに建てられ、かつて2度壊されてしまったが現在の塔は1894年頃、金山寺の僧侶によって再建されたものだ。実は1467年から2年間、禅と水墨画の修業のため遣明船で明に渡った「雪舟」は、金山寺が大変気に入ったようで「大唐揚子江心金山龍遊禪寺之図」を描いているが、慈寿塔が印象的に描かれている。この絵画は京都国立博物館蔵であり、ネットの写真でしか見ていないがとても素晴らしい絵画である。是非京都に行って見てみたい。当日は金山大門をめぐり並木道を歩き慈寿塔まで行ったが、何しろ雨が強くなりゆっくりと回れなかったのが残念である。本当は、近くにある「天下第一泉」を見る予定であったが早くバスに戻りたいということになった。ここはまた「牛郎織女(牽牛星と織姫星)」など中国四大民間話の一つであり、「白蛇伝」の舞台の一つとして杭州の西湖と共に有名である。白蛇伝は、何向真さんが上梓された「蒼海拾貝」に詳しく書かれているのでご覧になることをお勧めしたい。

中国各地を巡る中で、前述のように日本との接点に出会うのは嬉しいことである。その観点で一つ加えれば、「金山寺みそ」がある。この味噌の由来は諸説あるようだが、空海が金山寺から持ち帰ったとも言われている。真実は分からないがそうあって欲しい。

我々はホテルに向かいレストランで昼食を摂ることとなった。昼食だということにこれでもか、というくらい料理が出て来る。雨も小降りになったので午後1時過ぎに「北固山」に行くことになった。前述のように2008年に鎮江市に来たが、金山はその時行かな

かった。北固山は丁度10年振りで2回目である。この山も高さ53mと小さな山であるが、三国志の舞台の一つであり多くの話が残されていてとても有名である。まずは劉備玄德と孫権が曹操を倒す計画を練った場所ということだ。北固山は山全体が公園となっているが、入口の牌坊をくぐると小さな鳳凰池がありそこに真ん中が大きく裂けた岩がある。2人は剣でそれぞれこの岩を切り、どちらが天下を取れるのか占ったと伝えられている。まさか剣で岩を切り裂けないのでもともと裂け目のあった岩を見た誰かの創作であろう。岩の名前は「試剣石」と名付けられている。観光客は説明版を見て〈然もありなん〉という顔をしてじっと見ている。池のそばを通り頂上に続く道を登ると、阿倍仲麻呂の例の有名な句が刻まれた歌碑があった。いつ頃か分からないがこの地を訪れている。ここでも日本との接点が見られ嬉しく思った。まもなく頂上に着いた。そこには甘露寺、北固楼、多景楼などの寺院がありそのうちの一つ、甘露寺に入った。三国時代(220年～280年)の265年創建だそう。この寺院は、劉備が孫権の妹(孫尚香)と見合いをし結婚した所とされる。それから北固楼と多景楼に登って見ると、滔々と東流する長江、また大運河が長江に流れ込む絶景を眼下に今回も見ることが出来たが何度見ても雄大な景色は素晴らしい。

3つの小山があると言ったが、もう一つの「焦山」は時間の関係で見られなかった。北固山のすぐ東にある、長江の中に浮かぶ高さ70mの小島である。資料によれば、〈全山緑に覆われ、水面に浮かぶ碧玉のように見えることから「浮玉山」とも呼ばれている〉そうである。焦山に行くにはロープウェイか渡し船で行かねばならない。しかし何百年後には金山のように陸続きになるかも知れない。いや、何十年後かもしれない。この小島にも寺院がいくつも建っているが、清の康熙帝が命名した「定慧寺」が有名である。もう一つの見どころは、アヘン戦争時清政府が8座の大砲を設置しイギリスに対抗した「砲台遺跡」があり公開されているそう。

次号では歴史のある「西津渡街」および鎮江名物の「香酢」を紹介し、次の訪問地の「無錫」について書いていきたい。

(続く)